

☆

子ども会 (学習会) だより

☆

MY SKY 第18号

☆

☆

マイ スカイ

1996年10月1日火曜日発行(毎週火曜日定期発行)

発行 者

板野中学校

学 習 会

編集・文責：吉成正士

台風も無事に去り(?)、農作物に被害もなくすみました。でも雨が降らないぶん、もうすでに水不足になってきているところもあるようです。雨も程々に降ってもらわなくてはね……。まあ、私たちにしてみれば、涼しくてすごしやすくもあり、快適な毎日なのですが。でもそれもこれも、吉野川という大河が^{たいが}あってこそ言えることだと思います。私たちも自然の一部で、自然の中で生きてるんですね。ありがたい。ありがたい。



①第1回徳島県部落解放学習会中学生集会(8月7日：板野町ふれあいプラザ)

1学期に繰返し開かれた、県中(徳島県部落解放学習会中学生集会)のための実行委員会の本番が、8月7日地元板野町の、ふれあいプラザで開催されました。当日は250名にもおよぶ参加者が集まり、会場は人・人・人で埋め尽くされ、座る場所さえないほどでした。そして、多くの仲間の存在を初めて目の当たりにした驚きと喜びが、参加したみなさんの心に刻まれたかのようでした。この内容については、翌日の徳島新聞にも掲載されました。ご覧になったみなさんも多いと思います。

当日は、水平社宣言の朗読や、各学習会の現状報告、意見発表などが午前中に行われました。午後からは学年別に分かれての分散会が開かれ、同じ年代の仲間と接し、同じ場にいても勇気が湧いてくるようでした。

特に3年部会は最上級生だけあって、やはりしっかりした話し合いがなされ、活発な会になったようでした。これらの詳しい内容については、せっかくなので報告書としてまとめ、参加者に届けられればと思っています。がんばります！

なお、特に今回の取り組みで「良かったな」と思えたのは、本番よりもそれまでの準備会でなかったかと思います。初めは硬かった表情も、準備会を重ねるうちに軟らかくなり、言いたいことが言えるようになり、最後には互いの住所や電話番号まで交換するようになってきました。おそらく次の準備会までの間に連絡を取り合っていたんでしょうね。

次の準備会の時には「同じ学校ちゃうんかいな?」と思えるくらい仲良くなっていました。おかげで本番の時もコミュニケーションが充^{じゅうぶん}分にとれ、うまく進行できたと思います。たとえ出身中学校が違っても、これらの関係が高校へ行っても続き、それぞれの場でがんばりを支え合え

る仲間となり、本当に中身のある部落問題解決へ向けての取り組みが^{じみち}地道に進んでいくことを期待します。

また来年、^{さいらいねん}再来年は、今の1, 2年生が後を継いでいくことになるわけですが、今回の取り組みが打ち上げ花火で終わることのないように、そしてなおいっそう中身のある内容となるように、しっかりと学習をし、しっかりと人間となっていこうではありませんか!

みんな! がんばろう! そして、また来年!!



◇ これからの日程 ◇ ◇ ◇

今週は、1Bが全体学習ですね。資料は「人の値うち」です。なかなか考えさせられる



県内の生徒が差別解消について話し合った「部落解放学習会中学生集会」
＝板野町の町ふれあいプラザ

県内の中学生が部落差別のない社会づくりについて考える、その方策を探る初め生実行委主催)が七日、板

県内中学生 呼び掛け 初の学習会開く

部落解放 本音で討論

板野町

野郡板野町那東の町ふれあいプラザであった。参加者は、それぞれの地域や学校での活動状況を報告し合っている。差別の実態や解消策について本音で討論した。集会には、香川県の中学校も含めた計二十二中学校、二小学校から児童・生徒と教職員のほか同和教育関係者ら約二百五十人が参加した。

「一人ひとりが互いの人権を尊重し、自信を持って生きていける社会を築こう」と訴えた。午後からは、学年別に「自分の社会的立場を理解しよう」「被差別体験を出し合おう」などをテーマに発表に討議した。

午前中の全体会では、地域や学校などで行われている学習会などの活動状況を発表された後、意見交換。生徒たちは、差別の実態やそれに対する自分たちの思うことを交流が深まり充実感を率直に語り合っている。今日話し合

った課題などを持ち帰り、自分自身で考えることはなにかと問い続けながら実践したい」と今後の決意を述べた。

事務局を務めた板野中の吉成正士教諭は「以前より差別は見えにくくなったが、決して無くなったわけではない。そうした状況に一石を投じる内容の濃い集会になった。生徒たちの頑張りや敬意を表すとともに、来年以降も継続して集会を開き、充実させてほしい」と話していた。

資料なので、保護者の方にも読んでいただきたいと思います。どうぞ。

人の値うち

江口いと

いつ^{いっ}何時かもんぺをはいて バスに乗ったら 隣^{となりぎせき}座席の人は おばはんと呼んだ

戦時中よくはいたこの活動的なものを

どうやらこの人は年寄りの 着物と思っているらしい

よそ行きの着物に羽織^{はおり}を着て 汽車に乗ったら 人は私を奥さんと呼んだ

どうやら人の値うちは 着物で決まるらしい

講演がある^{なにになに} 何々大学の先生だと言え 内容が悪くとも

人々は耳をすませて聴き 良かったと言う

どうやら人の値うちは 肩^{かた}書きで決まるらしい

名もない人の講演には 人々はそわそわとして帰りを急ぐ

どうやら人の値うちは 学歴で決まるらしい

立派な家の娘さんが 部落^{よめ}にお嫁さんに来る

でも生まれた子どもはやっぱり 部落の子だと言われる

どうやら人の値うちは 生まれた所によって決まるらしい

人びとはいつの日 このあやまちに気付くであろうか

「^{いばら}荊を越えて」から

この資料を読み、どう感じたでしょうか？私自身、何度も目を通した文ではありますが、何度読んでも味があります。考えさせられます。人間の本当の生き方を突きつけられるようです。

今3年生は進路の問題で悩んでいる人がたくさんいると思いますが、この機会にしっかり自分を見つめてみてください。進路の問題で悩むべき事は何で、悩むべき事でないことは何なのか。悩むべき事でないことで悩んでしまっている人もたくさんいるのではないのでしょうか。私は修学旅行中に参加することができませんでしたが、3Cの全体学習にいられていた方の感想の中に、「部落問題学習と進路の問題がどう結びつくのかがよくわからない」と書かれていたものがありました。私の中では、しっかり結びついているように

思うのです。1, 2年生のみなさんも含めて、いろんな問題を考えることで、部落問題を見つめてみませんか。

★ ★ ★ ★ ★

10月3日(木) 1年第3回全体学習1年B組:資料「人の値うち」

板野養護学校との授業交流(板野中学校)

6日(日) 板野養護学校体育祭(板野養護学校)

8日(火) 『MY SKY 第19号』発行日

9日(水) 第3回板野中学校同和教育研究大会・2年第3回全体学習2年D組

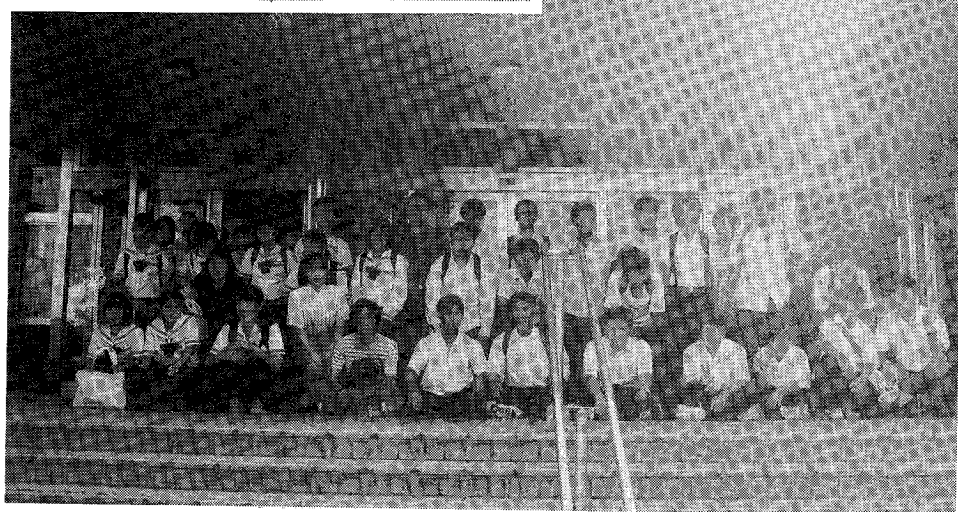
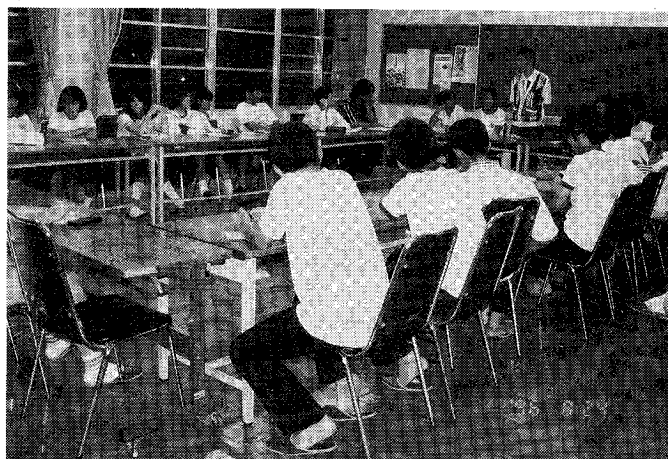
:資料「学習会によせる思い」(1996年度板野中学校部落問題意見発表会生徒作文)

11日(金) 子ども会(学習会)親睦バーベキュー大会(5:00~8:00:総合センター)

12日(土) 吉野川ピアノ紀行河野康弘コンサート(2:00~:文化の館さくらホール)

15日(火) 板野養護学校との交流学習会(板野中学校)

『MY SKY 第20号』発行日



羽曳野中学校との交流会

「天の瞳」で教育を問う

灰谷健次郎さんに聞く

子供や若者を取り巻く教育や社会のめがみは、目を覆いたくなるほどだ。

「でも、僕は児童文学の書き手として、現実を分析しているだけでは全く意味がないって気がしてきました」

確かに、問題の多い社会だけれども、それを踏みつけ、飛躍する力を人間は持っている。ちやうど植物が太陽に向かって伸びるようだ。

「そうした向日葵性、楽天性を武器

にして、人は暗い現実を乗り越えていく。そういう現実より一歩も二歩も進んだ人間像をリアリティーを持つて創造していくことが、小説家書くことではないか。僕は、読んだ人が生きるとよかった、人間は信頼できるところもあるやと、力づけられる作品を書きたい」

新作「天の瞳」

の主人公、倫太郎は、まさに太陽に向かってすすくと伸びる向日葵の男の子だ。自由を重んじる気風の保育園では、ワンパクなりで先生たちをてきまつきながら、伸び伸びと成長する。けれど小学校に入ると事態は一変。決まりきったことを、決まりきった形で覚えさせようとする学校や教師に、とてん反抗していく。

実は倫太郎には美在のま

読者を力づける作品描く



「暗い現実を踏み越える人物像をリアリティー持って書きたい」と語る灰谷健次郎さん＝東京都新宿区

学んで変わる 楽しさを表現

ルがいる。今年三十になるその青年は、限りなく個性的で魅力的なキャラクターの持ち主。しかし、それ故に学校のはなだした子になり、非行少年のレッテルを張られた。

「彼には保育園のとき、哲学的な語をしてくれるおじいさんがいた。その話を今でも完くきに覚えていて再現できる。おじいさんの言葉が、魂の中に入っているんですね。こんなすごい能力を持った子が学校では問題児にさせられていた」

今回出版された二巻は、幼年編として、倫太郎の保育園時代から小学五年生までを描いている。

「倫太郎が青年になるまで書き続け、六巻で完結したい。倫太郎は徹底的に、もの

を学んできた。ものを学んで変わるこの楽しさを知っているんです。なぜ学ぶか、それは自分が変化するから。あらかじめ学校が用意した知識の記憶力が学力だという認識は、根本的に変えなければ」

灰谷さんは、この六年ほど沖縄の渡嘉敷島で暮らしている。執筆の傍ら、海に潜り、マリで魚を釣って捕る。一日で八千円ほどの稼ぎになる。その前の十年間は、淡路島の山の中で農業をやり、自給自足の生活をした。

「僕は小説が書けへん人じゃないと嫌やねん。畑仕事か面白くも書けへん。面白ければ、それを書く。また作品が書きたくなったら書きますしね。せっかく生まれてきたんだから、自分が面白いと思うことと興味や関心のあることをして生きていきたいんです」。